

を、相宿にとりなしたる西鶴が骨稽なり真山集は醒翁山東京傳前車獨吟同じ蚊屋に寐たるばかりの契にて、常はそうが引たればこゝに不載もあらぬ我中、貞徳自注、是は世上に宗祇の蚊屋に寐たるといふ諺なり、新續犬筑波集万治三年印本三跋に、松永貞徳出自少遊歌林者尙矣、兼巧詠俳諧、寢乎宗祇蚊屋、傾乎山崎油樽、其技已熟、俳枕延寶八年印本、桃園定輪寺にて、花に下戸宗祇の蚊屋のとなへ有露沾、此句又言水撰蛇の鮓延寶七年印本には、たとへありとあり、十徳や夢を殘して蚊屋のきれ、蝶々子、桃園や三年寐ても昔の夢、東風近く正徳四年印本、祇空落髮の記、來山が詞書に、宗祇の蚊屋に三年とはふるくもいひ傳へて、是さへをかしきにといふ事あり、前に引し東風が、三年寐ても云々の句に合せ見るべし、東華集元祿十三年印本、支考撰、寐ても見ん宗祇の蚊屋にけふの月野徑、桃種集延寶六年西鶴撰、玉霞宗祇心を碎くとき、友吉、幾夜紙帳の假枕して、千春、雜巾延寶九年常矩撰、忍び逢よるは宗祇の蚊屋釣て、古今の大事傳へられけん、政也、それはそれ宗因の紙帳難波風、友靜、宗祇の蚊屋に、宗因の紙帳を對したる吟なるべし、總て昔の諺に、あひ蚊屋、あひ膳などは、へだてなくむつまじき中をいふなり、舞正語磨萬治元年印本、下の卷に、紹巴と一つ蚊屋の内に寐たりといふとも、連歌の下手は下手なるべし、ちかくは紹巴連歌に名だかかりし故、かく記し、なるべし、意は宗祇の蚊屋に同じ七百韻延寶中印本、宗祇餞別、相蚊屋の乳をはなれ、鳴別哉、似春、素堂とくく、句合、庵崎有無庵を問れしとき、瓢枕、宗祇の蚊屋はありやなしや、素堂がかく吟じたりと、祇空が序に見えたり、有無庵則祇空が庵也。

〔後奈良院御撰何曾〕やふれ蚊帳

かいる

〔長頭丸隨筆〕狂歌といふもの、時に臨みて讀なり、たゞおかしきふしによみて、すこしいやしきかたによむを、かへつてよきなりと、幽齋公も仰られし、去年の夏待郭公の題にて、

夏の夜はほととぎすにぞくらはる、蚊屋へも入らず待とせしまに、とよみ侍し。